

## 「死神」モチーフ再考：『死神の名付け親』 (KHM44)と古典落語『死神』との比較検討

著者	"梅内 幸信"
雑誌名	地域政策科学研究
巻	8
ページ	1-18
別言語のタイトル	"Reconsideration of the Motif "Death" : A Comparative Analysis of the Fairytale by the Brothers Grimm Godfather Death (KHM44) with the Japanese Classic Rakugo Death"
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/10898">http://hdl.handle.net/10232/10898</a>

## 「死神」モチーフ再考

—『死神の名付け親』（KHM44）と古典落語『死神』との比較検討—

梅内 幸信

## Reconsideration of the Motif “Death”

— A Comparative Analysis of the Fairytale by the Brothers Grimm  
*Godfather Death* (KHM44) with the Japanese Classic Rakugo *Death* —

Yukinobu UMENAI

## Abstract

The fairytales by the Brothers Grimm can be changed in their diffusion due to the cultural displacement of different races. Even though the core of the stories, namely their essence, will remain unchanged as long as man is around to tell them. This is because the core of the stories has resonance with cosmic rhythm, which is the original monad, and finally God.

By consideration and comparison of the fairytale by the Brothers Grimm *Godfather Death* (KHM44) with the Japanese classic rakugo *Death* I posed in this paper the following provisional 5 thesises.

1. The rakugo *Death* by Encho Sanyutei (1900-1979) was produced on the base of the fairytale by the Brothers Grimm *Godfather Death* (KHM44).
2. It is highly supposed that it was Ouchi Fukuchi (1841-1906), that gave Encho the information of the fairytale by the Brothers Grimm *Godfather Death* (KHM44).
3. Ouchi Fukuchi acquired probably the 2. edition of the fairytales by the Brothers Grimm.
4. Wilhelm Grimm (1786-1859) was enchanted by the image of candle as a human life (flame= head; candle=body).
5. Death stands generally in Europe at the feet of the patient and leads him to Hades after changing him by the flaming eyes into stone, like as Medusa.

## はじめに

グリム童話の筋は、その伝播に際して民族ないし国々のもつ文化的変位によって篩にかけられるものの、その核心、すなわち本質的部分は不変のものである。そして、その核心を成す物語精神は、人間の精神と共に永遠に存続するものである。つまり、その本質的部分は、宇宙のリズムと共鳴するものであって、最終的には根源的リズムである原单子<sup>1</sup>、すなわち神へと収

1 周知のように、ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）は、宇宙は单子から成り、それらの单子には、創造主である神によって調和が予定されている（「予定調和説」）とした。この考えに従えば、宇宙は单子から成り、その中心点に創造主である神に相当する「原单子」があると想定される。事実、動物磁気説を唱えたメスマー（Franz Anton Mesmer, 1734-1815）も、「宇宙の調和」を提唱するために「調和協会」を設立し、物体・人間・惑星から成る宇宙の中心に調和をもたらず神が存在すると考えた（ダーントン、ロバート『パリのメスマー——大革命と動物磁気催眠術——』稲生永訳、平凡社、1987年、131-132参照）。

斂するものである。

本稿においては、グリム童話『死神の名付け親』（KHM44）と古典落語『死神』を比較・考察することによって、暫定的ながら以下5つのテーゼを提出した。

1. 三遊亭圓朝の『死神』は、グリム童話『死神の名付け親』（KHM44）を素地として創作された。
2. 圓朝にグリム童話『死神の名付け親』に関する情報を提供したのは、福地桜痴であると推定される。
3. 福地桜痴は、グリム童話の第2版を入手していたと推定される。
4. ヴィルヘルム・グリムは、ロウソクのもつ生命（人生）のイメージ（炎＝頭；ロウソク＝身体）に捕われていた。
5. 死神は、病人の足元に立って、病人をメドゥーサの眼差しで石化してから冥界へ連れてゆく。

## 第1節 『死神の名付け親』（KHM44）

グリム童話『死神の名付け親』は、200収録されている『グリム童話集』において44番目の位置にある。この童話においては、ロウソクの炎のイメージが死と生に関する見事なコントラストを生み出している。周知のように、人生は生老病死という4つの構成要素から成るが、この童話は、これら四大構成要素が彩豊かに反射する万華鏡の世界を提示する。

昔、あるところに1人の貧しい男がいたが、この男には12人の子どもがあり、そのため昼も夜も齷齪と働かなければならなかった。しかし、13番目の子どもが生まれると男は、ついに困り果て、途方に暮れて、街道へ飛び出して、行き当たりばったりの人を名付け親に頼もうと考える。男が初めて出会った人は神さまで、神さまは男の悩みをすでにお見通しであったので、男にこう声をかける。「かわいそうにな、おまえが気の毒でならんから、わしがおまえの子どもに洗礼をさすけ、子どものめんどろを見て、この世で幸せにしてあげよう。」<sup>2</sup>しかし、この男は、「神さまが富と貧しさを、どんなに思慮深く割りふるのかを知らなかった」（S.227）ので、この人が神だと分かると、「それじゃ、あなたを名付け親にたのみたくはありません。あなたは、金持ちに施しをして、貧乏人にはひもじい思いをさせるんですから」（S.227）と答えるのである。続いて、悪魔が現れて、男にこう声をかける。「なにを探しているのかな。わしをおまえの子ども名付け親にすればな、その子にたんまりお金をやって、おまけにこの世のありとあらゆる楽しみを味わわせてやるさ。」（S.227f）ところが男は、この人が悪魔だと分かると、「あなたは人をだましたり、そそのかしたりするんですから」（S.228）という理由で、再び名付け親となることを拒否するのである。男が先に行くと、骨と皮ばかりに痩せ衰えた死神が寄ってきて、「わしを名付け親にしな。わしは、だれでも平等にあつかう死神じゃよ」と

2 Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. 3 Bde. Stuttgart (Reclam) 1980, Bd.1., S.227. 以下、この童話からの引用に関してはこの版に従い、本文引用末尾にページ数を付す。なお、翻訳に当たっては、次の最終版の翻訳を参考にさせて頂いた。『完訳 グリム童話集』[全5冊] 金田鬼一訳、岩波書店（文庫）、1981年、第2巻、38-48ページ。 / 『完訳グリム童話』(1-7) 野村滋訳、筑摩書房、1999年、第2巻、199-205ページ参照。

言う。すると男は、「あなたがぴったしの方です。あなたは、金持ちも貧乏人も差別しないでつれていきますから。うちの子の名付け親になっていただきましょう」と答える。これに応じて、死神も、「わしは、おまえの子どもを金持ちにし、有名にしてやろう。なにせ、わしを友とする者に、わしは不自由させんのじゃからのう」と言うのである。

このように、男は、自分としては最も良い判断をくだしたと考えているのであるが、しかし、悪魔ばかりではなく、神をも拒否したという点において、やはり、分別が足りなかったと言わざるをえない。ローマの占いによると、「13番目」という数字は「死、破壊、不幸」<sup>3</sup> を象徴的に示していると言われるが、そのようにこの13番目の息子は、折角死神の手助けによって医者になり、また同時に金持ちになるのであるが、しかし、その金銭に対する貪欲さから、結局は命を縮めてしまう羽目となるのである。

13番目の男の子が大きくなると、死神は、男の子を森の中へ連れて行き、そこに生えている薬草を指差して、男の子にこう言う。

「さあ、おまえに名付け親からの贈り物をあげよう。わしは、おまえを評判の医者にしてやろう。おまえが病人のところへ呼ばれたら、わしは、そのつどおまえに姿を見せよう。わしが病人の枕元に立っていたら、この人をまた元気にしてあげましょう、と胸をはって言うがよい。そう言って、あの薬草を病人に与えれば、病人は治るじゃろ。じゃがな、わしが病人の足元に立っていたら、そいつはわしのものじゃ。そしたら、おまえは、どんな手だてもむだでございます、この世のどんな医者にも救うことはかないません、と言わねばならん。じゃがな、気をつけるのじゃよ。この薬草をわしの意にそむいて使わないようにな。さもなくば、おまえはひどい目に会うかも知れんぞ。」(S.229)

死神から授けられた教えで若者は、世間で一番評判の良い医者になり、また同時に金持ちになる。ところが、その国の王が病気になり、この医者が王の元に行ってみると、死神が病人の足元に立っているのに気づく。もはや、彼の薬草も役に立たないのであるが、若者は、金銭欲に目が眩んで、死神をだますことを思いつく。死神が名付け親であるということに甘えて、医者は、病人の足をつかんで、向きを反対にし、死神が病人の枕元に立つように方向を変えてしまうのである。王は元気になるが、しかし、だまされた死神は、おこって若者に、こう警告する。「よくもわしをだましたな。今度だけは、おまえを大目に見てやろう。わしは、おまえの名付け親じゃからな。じゃが、もしおまえがもう一度わしをだましたら、命取りになるぞ。おまえ自身をしょっぴいて行くからな。」(S.229)

その後まもなく王の姫が重病にかかり、その悲しみのあまり、姫の命を救ってくれた者には、姫をとつがせ、王位を譲るというおふれを出させる。医者が姫のもとにきてみると、姫の足元に死神の姿を発見する。すると医者は、姫と結婚できるという幸運に惑わされて、死神の警告を完全に忘れ、再び姫を抱えて、死神が病人の枕元に立つように方向を変えてしまうのである。二度までだまされた死神は、若者を地下の洞穴に連れて行って、若者の命のロウソクが燃え尽きそうになっているのを見せる。それを見た若者は、消えそうになっている自分の命のロウソ

3 フリース、アト・ド・『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳、大修館書店、1988年、632ページ参照。

クに真新しい大きな口ウソクを継ぎ足してくれるよう死神に頼むのであるが、しかし、今度こそ若者に仕返しをしてやろうと考えていた死神は、口ウソクの継ぎ足しの際わざとしくじり、消えそうになっていた小さな口ウソクは、倒れて消え、それと共に、若者は死んでしまうのである。

## 第2節 圓朝作の古典落語『死神』

グリム童話『死神の名付け親』の類話は、『グリム童話集』に詳細な注釈を施したJ.ボルテとG.ポリーフカによれば、世界各地に散在すると言われる<sup>4</sup>。事実、日本にも落語の名人と呼ばれる初代三遊亭圓朝（本名、出淵次郎吉；1839-1900）が、『死神』という落語を明治20年代（1890年頃）に作っている<sup>5</sup>。この落語は、明治30年代に三遊亭円左が口演してからよく知られるようになり、「ステテコの円遊」は、これを改作して、『<sup>ほまれ たいこ</sup>誉の辯問』と題した<sup>6</sup>。ちなみに、日本において、「死神」という言葉が一般に知られるようになったのは、近世になってからである。とりわけ、歌舞伎芝居における洒落た文句や近松門左衛門の浄瑠璃『心中天の網島』における「死神憑いた耳へは、意見も道理も入るまじ」という文句が人口に膾炙したと言われる<sup>7</sup>。

管了法が日本において初めて『グリム童話集』を部分的ながら翻訳紹介したのは、1887（明治20）年のことであるし、また、この翻訳に『死神の名付け親』は収録されていないので<sup>8</sup>、圓朝自身がこのグリム童話を知っていたとは想像しがたい。三遊亭圓朝の伝記を書いた永井哲夫（ながい・ひろお）氏によれば、落語研究家である今村信雄氏（1894-1959）が、「圓朝の『死神』は、イタリア歌劇『靴直しくリピスノ』から翻案したもの」という事実を考証したと言われる<sup>9</sup>。今村氏は、その著書『落語の世界』における「圓朝作の死神」というエッセイの中で、『死神』に関して、次のように述べている。

「死神」という落語が二通りある。初代円遊のやっていたものと、先代の金馬が十八番

4 Vgl. Bolte, Johannes / Polivka, Georg: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. 4 Bde. Hildesheim · New York (G. Olms) 1982, 1.Bd., S.377-388. 物語全体としては、「神」が「聖母マリア」と、そして、「死神」が「死の女神」に交替している類話もある。また、上記の「モチーフの構成」でも分かるように、「男」と「その息子」、「最後のお祈りを中断すること」と「ベッドの向きを反対にすること」、「医者にお祈りを終わらせること」と「地下の洞窟の中で医者に見せた彼の口ウソクの火を消すこと」というモチーフ間においては、その順列と組み合わせから、様々な類話が生み出されている。

5 麻生芳伸『落語百選 秋』筑摩書房、1999年、384-399ページ参照。「古典は理屈でなく、あくまでも人間の感性ハートに訴えるのが身上だが、本篇には作者、三遊亭圓朝自身の、人間に対する悟りのようなものが盛り込まれている。/『落語百選』中、ベスト・テンに入る名作。」(399ページ)

6 『日本大百科全書 11』小学館、1994年、100ページ参照。/東大落語会（編）『増補落語事典』青蛙房、2008年、227-228ページ参照。

7 同所参照。

8 『明治期グリム童話翻訳集成』（全5巻）、紀伊國屋書店、1999年。第5巻、1-18ページ参照、「グリム童話翻訳文学年表 1」（明治編）。

9 永井哲夫『新版 三遊亭圓朝』青蛙房、1998年、271-272ページ参照。圓朝の表記は、本文ではこの表記を用いる。

にしていたものである。この落語の原作は、イタリアのオペラ「靴直しと妖精」である。私は赤坂のロイヤル館で清水金太郎、静子夫妻と原信子の演じたのを見たことがある。クリスピーノという靴直しが金に困って古井戸へ身を投げて死のうとした時に、突然井戸の中から妖精が現れて、クリスピーノに金を恵み、病人の生死の鑑別法を教えてくれる。そのおかげで靴直しは資産家になったが、ある日慾に迷って妖精との約束を破ったために、かえって自分の命を縮める結果になる。という筋である<sup>10</sup>。

確かに、今村信雄氏は、明治38年3月に「落語研究会」を創設し、現代落語の発展に多大なる貢献をなした今村次郎氏の息子であり、これまた父親の後を継いで、この研究会を第4次まで支えた功労者ではある<sup>11</sup>。しかしながら、今村信雄氏が、大正から昭和中期までの時代において落語の援助者として多大な貢献をなしたかも知れないが、グリム童話における『死神の名付け親』を知っていたとは思われない。というのも、確かにイタリア・オペラ「クリスピーノと代母」<sup>12</sup>と『死神の名付け親』とは、その遠い源流においては一つの同じ場所から生まれているかも知れないが、しかし、以下のような相違点を指摘すれば、むしろ違うという判断をくださざるをえないであろう。

グリム童話『死神の名付け親』とイタリア・オペラ「クリスピーノと代母」との相違点

項目	作品	グリム童話『死神の名付け親』	イタリア・オペラ「クリスピーノと代母」
1. 寿命の象徴		ロウソク	ランプ
2. 死神の性		男性	女性
3. 生死の判断の伝授			×
4. 死神の復讐			×
5. 「寝床廻し」			×

\* は有を、×は無を示す。

これだけの大きな相違点があれば、イタリアのオペラ「クリスピーノと代母」が、直接三遊亭圓朝作の『死神』の種本になったという判断をくだすことはできないであろう。その証拠に、CDに収録されて、現在日本で購入できる落語『死神』では、この5つの相違点がほぼ踏襲されている<sup>13</sup>。口承芸術である落語の伝統というものは、師匠から弟子へと、想像以上に厳格に伝授されると考えられる。しかも圓朝が、このオペラを基にこれらの相違点を創作しながら改作したとも思われない。なぜならば、グリム童話『死神の名付け親』を圓朝作の『死神』の種本だと見なせば、ほとんど本質的な筋は一致しているからである。柳家権太桜の『死神』の解

10 今村信雄『落語の世界』平凡社、2000年、206-209参照。この本は、本来1956年11月に青蛙房から出版されている。

11 同書、344-345ページ参照。

12 別名「クリスピーノと妖精」とも言う。/ Ricci, Federico e Luigi: Crispino e la comare (Crispino and the Fairy). GB 29095/96-2, Bolgna (Bongiovanni) 1989. このオペラの粗筋に関しては、このCDの解説(13-20ページ)参照。

説者瀧口雅仁氏は、＜三遊亭圓朝がイタリアのオペラ「クリスピーノと代母」からヒントを得て作った噺と言われ（近年、グリム童話の中に原話があるという論考も発表されたが……）、今でも季節を問わず、よく演じられている＞というようなおざなりな解説を書いている。「死神」に関する研究も進んでいるので、「三遊亭圓朝がイタリアのオペラ『クリスピーノと死神』からヒントを得て作った噺」という説は、信憑性のない説として、そろそろこの辺で否定されなければならないと思われる<sup>14</sup>。

圓朝の落語『死神』は、本質的な粗筋においてはグリム童話『死神の名付け親』に似ている。その粗筋は、「貧乏神に取り憑かれたある1人の男が、死神の助言によって、病人の生死を判断する教えを受ける。これによって男は、名医という評判を勝ち得て金持ちになるが、しかし、贅沢三昧によって金を使い果たし、金銭欲から二度まで死神との約束を破る。それで死神は、最後には男に仕返しをし、男は死ぬ羽目となる」といったものである<sup>15</sup>。圓朝作の『死神』とグリム童話『死神の名付け親』とは、その基本的粗筋において本質的相違は無い。当然のこと

13 現在、筆者が入手している落語『死神』に関するCDは、次の10点である。1) 六代目圓生『圓生百席23 品川心中 上/下；死神』（SRCL 3845-46）、株式会社ソニー・ミュージックエンタテイメント、1997年；『落語 昭和の名人16；死神/弥次郎/開帳の雪隠』（SHRKG-16）、小学館、2009年、2) 三代目三遊亭金馬『NHK 落語名人選58；死神/夢金』NHK サービスセンター、1994年、3) 柳家小三治『落語名人会41 柳家小三治17；死神』（SRCL 3613）、株式会社ソニー・ミュージックエンタテイメント、1996年、4) 柳家権太楼『柳家権太楼 名演集7；青菜・死神』（PCCG-00937）、ポニーキャニオン、2009年、5) 柳家権太楼『落語百選 DVD コレクション16 死神』（RGD-016）、デアゴスティーニ・ジャパン、2009年、6) 三遊亭圓楽『たがや/死神/蔵前駕籠』（三遊亭圓楽独演会全集第8集；TOCF-55138）、東芝EMI株式会社、2003年、7) 五代目古今亭今輔『藁人形/死神/葛湯』（VZCG-293）、財団法人ビクター伝統文化振興財団、2002年、8) 立川志の輔『はんどたおる/死神』（SICL-38）、ソニー・ミュージックエンタテイメント、2002年、9) 昔昔亭桃太郎『春雨宿/死神』（PCCG-01023）、ポニーキャニオン、2009年、10) 立川談志『談志百席「鱧屋」死神』（COCJ-36352）、竹書房、コロニアミュージックエンタテイメント、2010年。

これら10点の話において5つの相違点がほぼ踏襲されていると言ったのは、以下の理由による。三代目三遊亭金馬は、この落語を圓朝ではなく、その弟子圓遊が学び、その師匠に言わせれば、「壊してしまった」（3の解説4ページ参照）方の『死神』を受け継いだ。この圓遊は、「ステテコの圓遊」と呼ばれた破天荒のお笑い落語家で、この師匠圓朝から教わった『死神』をお目出度い落語へと改ざんしてしまったと言われる。（この圓遊については、六代目三遊亭圓生『明治の寄席芸人』青蛙房、2001年、12-38ページ参照。）つまり、そこでは死神の復讐など語られず、医者とは冥界にある寿命の口ウソクを見て、自分の消えかかっている寿命の口ウソクばかりではなく、隣近所や友人・知人の寿命の口ウソクまで継ぎ足すという、すべて「めでたし、めでたし」のハッピーエンドで終わっている。死神との約束を破ったにもかかわらずハッピーエンドで終わったのでは、童話における「素朴な道德の機能」は停止し、童話の命の火は消えてしまわざるをえない。このハッピーエンドの『死神』は、やはり物語の本質を損なっていると判断せざるをえない。この点に三代目三遊亭金馬も気づいたのであろうか、その落語全集の中にこの『死神』は収録されていない。＜『三代目三遊亭金馬全集』（ANY8-20）1995年、参照。＞やはり、三代目三遊亭金馬には、深刻な落語は性に合わなかったのかも知れない。落語『死神』を確立したのは六代目三遊亭圓生であるが、彼は二代目金馬を経由した『死神』の決定版を作ったという自負をもっている。（2における能篠三郎氏の解説参照。）6の今輔の話は、1960（昭和35）年9月7日放送されたものである。この話だけが、他の話と反対に「枕元＝生；足元＝死」という生死の判断を採用している。これは、今輔がグリム童話を読んで研究した結果であろう。グリム童話『死神の名付け親』の当時の翻訳は、確実に第7版からの翻訳であった。9の話も、最終的にはハッピーエンドで終わっているが、これは赤塚不二夫流の破天荒の滑稽さを加味している。

14 六代目三遊亭圓生『死神/弥次郎/開帳の雪隠』（落語 昭和の名人 決定版16）、小学館、2009年、参照。ここにおける『死神』に関する解説では、グリム童話を出典とする説と『クリスピーノと代母』を出典とする説とを紹介しているが、グリム童話の方を先に紹介している（解説10ページ参照）。

15 麻生芳伸、上掲書、384-399ページ参照。

ながら、宗教的なモチーフは、一般に、別の宗教をもつ国に伝えられる場合には、削除されるか、あるいは大幅な修正を受ける可能性があると言わざるをえない。同じように、圓朝は、ヨーロッパの話をも日本の落語に改作するに当たって、若干の修正を施している。そこで、グリム童話と古典落語との異同を明確にするために、両者の物語を13項目にわたって比較してみると、その結果は、次の表としてまとめられる。

グリム童話『死神の名付け親』と古典落語『死神』との比較表

項目	作品	『死神の名付け親』 (KHM44)；第7版	『死神』(圓朝作)
1. 主人公		貧しい男の13番目の息子。	所帯持ちの貧しい男。
2. 死神の役割		名付け親。	相談相手。
3. 主人公の職業		医者。	医者。
4. 死神の教え		死神が枕元にいれば助かり、足元にいれば助からない。(第2版のみ逆。)	死神が足元にいれば助かり、枕元にいれば助からない。(大半の落語が、この通り。)
5. 薬		薬草。	なし。(いい加減なもの。)
6. 呪文		なし。	「あじゃらかもくれん、あるじえりあ、てけれつつのばア」、2つ手を叩く <sup>16</sup> 。
7. 最初の病人		王。	お店のお嬢さん。
8. 2番目の病人		姫。	江戸でも指折りの大家。
9. その謝礼		姫の婿となり、王位を継承する。	3千両。
10. ロウソクの種類		大, 中, 小。	長いもの, 半分, 消えそうなもの。
11. ロウソクを継ぎ足す		医者が死神に頼む。	死神が医者に提案する。
12. ロウソクを継ぎ足す者		死神。	医者。
13. 神さまと悪魔		登場し、拒否される。	登場しない。

この分析結果から判明する古典落語における大きな相違は、主として次の5点である。

1. 神と悪魔を登場させていない。
2. 死神は、「名付け親」ではなく、「相談相手」の役割を果たしている。
3. 主人公は、「薬草」ではなく、「呪文」を用いる。
4. 最初の病人は、「王」から「お店のお嬢さん」に変えられている。2番目の病人は、「姫」から「江戸でも指折りの大家」に変えられている。
5. 謝礼は、「姫の婿となり、王位を継承すること」から「3千両」に変えられている。

16 筆者は、この呪文が、六代目圓生の『死神』を聞く限り、圓生の勝手な創作かと思っていた。しかし、今村信夫氏の『落語の世界』によれば、当時「落語の四天王」の1人と呼ばれた4代目立川談志は、その18番「釜掘り」で、「アジャレン、モクレン、キンチャン、カーマル、セキテイ喜ぶ、テケレッツのバア」という謎めいた文句を哀れな声で繰り返し、人気を博したという(『落語の世界』, 63-64ページ参照)。

イタリアのオペラ「クリスピーノと代母」と圓朝作『死神』との間には、慎重に比較検討すると、類似点というよりは、むしろ相違点の方が目立ってくる。他方、圓朝作『死神』とグリム童話『死神の名付け親』との荒筋には、本質的な差異は見当たらない。ただし、死神の教える「生死の判断」に関しては、大きな相違が存在する。つまり、圓朝作『死神』で死神は、「自分が足元にいれば助かり、枕元にいれば助からない」と教える。これに対して、グリム童話『死神の名付け親』(第7版)で死神は、「自分が枕元にいれば助かり、足元にいれば助からない」と教えるのである。奇妙なことに、初版から第7版まで出版された『グリム童話集』の中で、第2版のみが圓朝作『死神』におけるのと同じように、「死神が足元にいれば助かり、枕元にいれば助からない」という教えになっている。なぜ、『グリム童話集』の第2版に収録されている『死神の名付け親』において、日本古典落語『死神』におけるのと同じ死神の教えが見られるのであろうか。これらの疑問が解明されねばならない。確かに、レレケがいわゆる「寝床回し」に関して、古今のヨーロッパ文学を広く渉猟して考察した結果によると、「枕元=生；足元=死」という図式が見られる作品は8つあり、他方「足元=生；枕元=死」という図式が見られる作品は5つあり、一見どちらでもよいような結論に終わっている<sup>17</sup>。それにしても一体、グリム兄弟は、なぜ第2版を除く他の版において「死神が枕元にいれば助かり、足元にいれば助からない」という判断を死神に説かせたのであろうか。これは、決してグリム兄弟の単なる誤解から生じたものではないと思われる。

### 第3節 グリム童話初版と第7版との異同

グリム兄弟が自分たちの童話を伝承されたまま忠実に採集したと、その初版において言明したことは、よく知られた事実である。そこで彼らは、次のように述べている。

私たちは、これらの昔話をできるだけ純粋な形で理解しようと努力しました。押韻や頭韻によって話の流れが妨げられる場合も多く見うけられます。それに、時には頭韻を踏んでいるものさえあります。けれども、語られるときに歌われるわけでは決してありません。そしてこれこそがいちばん古い形で、すぐれたものなのです。いかなる状況も書き加えたり、美化したり、削除もしませんでした。というのは、それ自体でこんなにも豊かな話を、アナロジーや類推で長くしないように努めたからです。昔話は作り出すことができ

17 Vgl. Heinz Rölleke: Der Tod in den Märchen der Brüder Grimm. In: *Tod und Wandel im Märchen*. Regensburg (Röth) 1991, S. 81.

Zu Häupten=leben; Zu Füßen=sterben	Zu Füßen=leben; Zu Häupten=sterben
1. Ayrer (um1600)	Island (1338)
2. Bilderbanquet (1691)	Hans Sachs (1547)
3. Familie Wild (mündlich) 1811	Pratonius (1667)
4. Grimm (1812)	Schilling (1811)
5. Grimm (1837-57)	Grimm (1819)
6. Bechstein (1845)	
7. Storm (1887)	
8. Zitelmann (1908)	

ないものなのです。こういった意味では、ドイツにはこれまで昔話の収集は存在しませんでした。……<sup>18</sup>

グリム兄弟のこういった言明にもかかわらず、彼らが初版から第7版までに至る増補・改訂の過程で、かなりテキストを書き換えたり、書き加えたりしたという事実は、ジョン・M・エリス<sup>19</sup>によってかなり手厳しく批判されたところである。また、この点は小澤氏によってかなり詳細に検討されている<sup>20</sup>。ヤーコプ・グリムは、のちの版において弟のヴィルヘルムに童話集の編集や序文の執筆を任せたとはいっても、エーレンベルク手稿や初版出版の際は言うまでもなく、童話の収集と解説に関しては、決して気を抜くようなことはなかったと、1860年2月19日付けのウィーン大学プファイファー教授宛の手紙の中で、次のように述べている。

……私は、この作品（童話集）の誕生と初版のためには、まさに彼（ヴィルヘルム）よりもはるかに、ひょっとしたら彼以上に尽力しましたし、これらの伝承童話の価値を神話に対しても同じように認めましたので、童話集の正確さを大いに尊重し、飾り立てることを拒否したのです。のちの版につきましては、私がドイツ文法に没頭してしまいましたので、ヴィルヘルムに編集させ、序文を書かせたのですが、とは言いましても、童話収集と童話解説に関しましては、一度たりとも気を抜くようなことはなかったのです。……<sup>21</sup>

にもかかわらず、厳格な文献学者であるヤーコプ・グリムでさえ、初版の段階では『死神の名付け親』における死神の立つ位置の違いについては気づかなかったと言わざるをえない。というのも、すでに初版において「死神が病人の枕元に立てば病人は助かり、足元に立てば死ぬ」という位置関係が述べられているからである。従って、このテキストを採用したのはヴィルヘルムにほかならないと思われる。その証拠に、1819年の第2版においては、ヤーコプが編集した『ドイツ神話学』における「死神」の項目にあるように、「死神が病人の足元に立てば病人は助かり、病人の枕元に立てば死ぬ」と記載されている<sup>22</sup>。間違いなく、ヤーコプがヴィルヘルムのテキストが実際の類話と違うことに気づいて、自分のテキストと入れ替えたに違いない。ところが、第3版以降ほぼ全面的に童話集の改訂に携わることとなったヴィルヘルムが、再びヤーコプのテキストと自分のテキストを入れ替えてしまったと推定される。

それでは一体、なぜヴィルヘルムは、二度にわたってまでこの位置関係を逆転させたのであろうか。この理由は、かなりデリケートな問題であると思われるので、具体的に例を挙げながら、詳細に検討してみる必要がある。まず初めに、本稿で用いている第7版から、死神の教えを筆者による訳と共に、原文を引用してみよう。

18 『初版グリム童話集』（全4巻）、白水社、1997年、第1巻、17ページ。

19 エリス、ジョン・M・『一つよけいなおとぎ話』池田香代子・薩摩竜郎訳、新曜社、1993年、参照。

20 小澤俊夫『グリム童話の誕生』朝日新聞社、1997年、参照。『グリム童話考』講談社、1999年、参照。

21 *Briefwechsel der Brüder Grimm*. 2 Bde. Stuttgart (S. Hirzel) 2002, 2.Bd., S.185.

22 グリム兄弟（編）『完訳グリム童話（ ）』小澤俊夫訳、ぎょうせい、1997年、『名づけ親になった死に神』、285-290ページ参照。この訳は、第2版からの翻訳である。

「さあ、おまえに名付け親からの贈り物をあげよう。わしは、おまえを評判の医者にしてやろう。おまえが病人のところへ呼ばれたら、わしは、そのつどおまえに姿を見せよう。わしが病人の枕元に立っていたら、この人をまた元気にしてあげましょう、と胸をはって言うがよい。そう言って、あの薬草を病人に与えれば、病人は治るじゃろ。じゃがな、わしが病人の足元に立っていたら、そいつはわしのものじゃ。そしたら、おまえは、どんな手だてもむだでございます、この世のどんな医者にも救うことはかないません、と言わねばならん。じゃがな、気をつけるのじゃよ。この薬草をわしの意にそむいて使わないようにな。さもなくば、おまえはひどい目に会うかも知れんぞ。」<sup>23</sup>

このテキストは、初版において次のように書かれていた。

「さあ、おまえを医者にしてやろう。おまえが病人のところに呼ばれたら、おまえが気をつけるのは、ただわしが病人の枕元に立っているのが見えるかどうかじゃよ。枕元に立っていたら、なにも言うにはおよばん。そしたら、このピンの薬を病人にかがしてな、その薬を病人の両足にぬってやるがいい。そうすれば、やがて病人は治るじゃろ。じゃがな、もしわしが、足元に立っていたら、その病人はおしまいじゃよ。そしたら、その病人は、わしのものじゃ。そのときにや、治療を始めるなんてことは止めるのじゃ。」<sup>24</sup>

初版と第7版とにおけるテキストの異同に関しては、これほど短いテキストにもかかわらず、語句に関してかなり多くの異同が発見されるが、しかし、主なものは次の2点である。

1. 初版では「病人にピンに入っている薬をかがせ、それを病人の両足にぬれば治る」となっているのに反し、第7版では「薬草を病人に与えれば治る」となっている。
2. 初版では死神の医者に対する警告がないが、しかし、第7版では死神の医者に対する警告が書き加えられている。

2の異同に着目すれば、この種の書き換えないし書き加えは、『グリム童話集』全体にわたって見られる。そして、この種の変更は、主としてヴィルヘルムの手になるものと考えられる。さて、慎重な分析が必要とされるのは、1の異同であると思われる。初版において「それ（薬）

23 »Jetzt sollst du dein Patengeschenk empfangen. Ich mache dich zu einem berühmten Arzt. Wenn du zu einem Kranken gerufen wirst, so will ich dir jedesmal erscheinen; steh ich zu Häupten des Kranken, so kannst du keck sprechen, du wolltest ihn wieder gesund machen, und gibst du ihm dann von jenem Kraut ein, so wird er genesen; steh ich aber zu Füßen des Kranken, so ist er mein, und du mußt sagen, alle Hilfe sei umsonst, und kein Arzt in der Welt könne ihn retten. Aber hüte dich, daß du das Kraut nicht gegen meinen Willen gebrauchst, es könnte dir schlimm ergehen.« (S.228)

24 „jetzt sollst du ein Doctor werden; du brauchst nur Acht zu geben, wenn du zu einem Kranken gerufen wirst und du siehst mich zu seinem Haupte stehen, so hats nichts zu sagen, laß ihn dann an dieser Flasche riechen, salb ihm die Füße damit, so wird er bald wieder gesund seyn; steh ich aber zu den Füßen, dann ists aus, dann will ich ihn haben, und untersteh dich nicht eine Cur anzufangen.“ Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. 2 Bde. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1996. 1.Bd., S.194.

を病人の両足にぬれば治る」となっているのが、なぜ第7版において「薬草を病人に与えれば治る」と書き換えられたのであろうか。

1の異同に関し、ドイツ語の動詞 „salben“ は、[香油(軟膏)を塗る]<sup>25</sup>を意味し、その名詞 „Salbe“ は、語源上遡る古代インド語、あるいはギリシア語において「油、脂肪、獣脂」を意味していた<sup>26</sup>。これは、おおよそ日本のメンソレータムか、中国のタイガーバームのような軟膏であると考えられる。この関連において、この童話を分析している落合氏の見解によれば、初版におけるように死神が病人の足元に立てば、「足元の死神への恐怖のために、病人の足に薬を塗り込めないとすることだろう」と解釈している。そして、第7版の変更に関しては、「グリムは初版本で、死神を足元に立たせたお陰で、話の内容が変わり、薬草を飲む行為(口)が大事となったのに、死神を足元に立たせ続けた」と解釈している<sup>27</sup>。初版における「それ(薬)を病人の両足にぬれば治る」は、第7版において、「薬草を病人に与えれば治る」と変更されている。ここで用いられているドイツ語の動詞 „eingeben“ は、「薬」に関しては「投与する」ことを意味している<sup>28</sup>。ここでこのドイツ語動詞の目的語が名詞 „Kraut“ 「薬草」<sup>29</sup>であることを考慮に入れれば、「投与する」とは、通常「丸薬で与えるか、煎じ薬として与えるか」としか考えられない。いずれにしても、口から飲ませることになる。

25 『独和大辞典[コンパクト版]』小学館、1990年、1841ページ。

26 Vgl. Duden. 10 Bde. Mannheim/Wien/Zürich (Duden) 1963, 7.Bd., S.584.

26 落合直文<グリムのメールヒェンと圓生の落語—「死神の名付け親」(KHM44)と「死神」—>。日大農獣医教養紀要、32号、1996年、47ページ。ただし、落合氏は、この段階で生死に関する判断「足元=生; 枕元=死」が、第2版において逆になっている事実気づいていないように思われる。同論文で落合氏は、ヘッセン州で1811年10月20日に採集された『死神の名付け親』の出典先としてJ. ポルテとG. ポリーファカの『註解集』(1937年)からイタリアの短編小説を引用している。「ピストーヤ出身(イタリア)のフォルテグエリイは、1550年に、あるノヴェレ(短編小説)の中で、死神おばちゃん(Todesgöttin)が名付け親(die Gevatterin)として、アスツォ・インピデア(Astio Invidia)夫婦の最初の息子の誕生のときに申し出た。そしてアスツォに医者としてふさわしい衣服をさせることをすすめた。そして病人がいたとき、その息子は、彼女が病人の枕元(頭)に立っているときは、なおらないことを宣言し、彼女が足元に立っているときは、病気が回復することを伝えなさいといった」(落合論文、45ページ)。ところが、この後47ページで初版における「枕元=生; 足元=死」という図式に関し、<死神が足元に立った時、病人は確実に死に到ると言うこと>であり、上記の「古い民謡」の内容と一致すると述べている。しかし、この「古い民謡」の図式は「枕元=死; 足元=生」であるからして、一致していないことになる。

筆者は、«Die Flamme der Kerze als Symbol des Lebens --- Über die Symbolik der Kerze im Grimmschen Märchen „Der Gevatter Tod“ (KHM44) und im klassischen japanischen Bretteltheaterstück „Der Tod“ ---»と題して、この論文とほぼ同様の内容を2002年8月に北京で開催された「アジア・ゲルマニスト会議北京」で発表した。この論文の契機は、確かにグリム研究の一環として『死神の名付け親』という童話に出会ったことにある。しかし、筆者は、その時点から35年ほど遡った小学4年生のときに、有島一郎が死神を、フランキー堺が八五郎を、そしておせつを香川京子が演じた『幽霊繁盛記』(内容は落語『死神』とほぼ同じ)を見たことがある。そのとき筆者は、「命の炎」「ロウソクの長さで表される人間の寿命」「地下の洞窟で燃える無数のロウソク」といった要素に不思議なくらい魅了されてしまった。その時点で筆者は、その感動の理由を突き止めることはできなかった。しかし、ここに至って、幾分なりともその感動の中身を解明できたように思う。落合氏の場合も同様に、グリム童話というよりは、圓生の演じた落語『死神』にその論文を執筆する契機があったと推測される。ただし、筆者がドイツ語で論文をまとめる時点まで落合氏の論文を知らなかったことは、ひとえに筆者の怠慢に帰せられる。ここで指摘しておきたいことは、感動に基づけば、異なる研究者であっても、同じ発見をし、似たようなテーマで論文を書きうるといふ奇しき「同時性」である。

28 『独和大辞典』、上掲書、581ページ。

29 同書、1280ページ。

それでは、ヴィルヘルムは、伝承されてきた死神の位置関係を、初版において単に自分の個人的な体験に基づき、「それ（薬）を病人の両足にぬれば治る」というイメージに捕われて、死神の立つ位置関係を従来と反対にしたのであろうか。もしそうであるとすれば、薬効上、「煎じ薬を投与する」方が時勢に適っているとして当該箇所を変更したとき、なぜ第7版において死神の立つ位置関係を初版と逆の位置関係にしなかったのであろうか。落合氏は、同論文の中でこの調整をヴィルヘルムが失念したかのように論じている（47ページ参照）。しかしヴィルヘルムは、初版における生死の判断「枕元 = 生；足元 = 死」を、恐らくヤーコブに指摘され、第2版において『ドイツ神話学』における記述と合わせて「枕元 = 死；足元 = 生」と変更したにもかかわらず、再び第3版以降「枕元 = 生；足元 = 死」という図式に変更しているのである。筆者の考えでは、詩的才能の豊かなヴィルヘルムは、単に個人的な体験に基づいて死神の位置関係を変更したのではなく、やはり当初からロウソクのもつ象徴力に無意識のうちに大きな影響を被ったと思われてならない。

#### 第4節 生死の判断

生老病死は人生に付きもので、人間は、一旦生まれると、必ず老い、病気に罹り、やがては死ぬ運命にある。とはいえ、死を恐れるのも人の常である。古代より、「不老不死の薬」に関する伝説は数多くある。秦の始皇帝は、「不老不死の薬」を求めて、徐福を蓬莱山へ派遣したと言われる<sup>30</sup>。医学、あるいは延命術と呼ばれる知識も、ある意味においては、人間の死に対する恐怖から生み出されたとも言えるであろう。近代的な医学がまだ発達していなかった古代においては、自然の治癒力、すなわち種々の薬、とりわけ薬草に関する知識が重要であった。医学の知識に関しては、古代ギリシアにおいて「医学の父」と呼ばれたヒポクラテス（Hippokrates, um 460 v.Chr.-375 v.Chr.）が有名である。しかし、薬草の知識は、すでにそれ以前の古代エジプトにおいて、かなり発達していたと言われる。現代においても、不治の病に対する特効薬が開発され、死に対する不安から、不治の病に罹った患者は、すがりつく思いで薬に助けを求める。

ここにおいて興味深い事実は、男性が古来より、もっぱら狩猟や戦争に従事することの方が多かったせいであろうか、薬草の知識は主として女性によって受け継がれてきたということである。また、近代に至るまで、女性には文字を読んだり書いたりする教養が不必要と考えられたために、薬草の知識の伝授は、大概口頭による伝授で継承されてきた。従って、薬草の知識を駆使して、人の命を救ったり、不思議な力を示した女性たちは、彼女らの不思議な力を妬んだり、恨んだりした者たちの誹謗中傷の文書に、効果的に反論できなかったのである。その結果、薬草の知識をもつ女性たちは、やがて「魔女」という否定的にして、反社会的なレッテルを貼られる運命となったのである<sup>31</sup>。

言うまでもなく、古代・中世において薬草に関する知識は、使いようによっては、莫大な富をもたらしたに違いない。従ってまた、そのような知識の伝授は、極めて慎重に行なわれなけ

30 三谷菜沙夫（みたに・まさお）『徐福伝説の謎』三一書房、1992年、45-81ページ参照。

31 Vgl. Singer, Claire: *Das große Buch der Hexen*. Wien (Tosa) 2000, S.44.

ればならなかったであろう。薬草に関する知識を受け継ぐこのような女系一族は、この知識を、代々娘にのみ伝授していたものと推測される。魔女の薬草としては、中世以来、代表的なものとしては、媚薬と眠り薬としての効果をもつ「マンドラゴラ」(Alraune)、幻覚を引き起こし、性的興奮剤となる「トリカブト」(Eisenhut)、胃腸の病気と月経障害に効く「オトギリソウ」(Johanniskraut)、麻酔作用をもち、躁狂の発作も引き起こし、場合によっては、喘息や痙攣に効く「ベラドンナ」(Tollkirsche) が知られている<sup>32</sup>。これらの薬草は、その秘密を守るために、高い壁に囲まれた庭で、花や野菜と共に栽培し、その薬草に関する知識の伝授は、秘密裏に行なわれていたと考えられる。

『死神の名付け親』において、死神は医者によって二度までだまされたので、ついにおこって医者を地下の洞穴へ連れて行く。そこには命のロウソクが何千本となく燃えているが、その長さは、大中小と様々である。そこで死神は、医者に「これが人間の命の火じゃよ」(S.210) と言って、ロウソクの火を指差す。医者が「わたしの命の火を見せてください」と頼むと、死神は、今にも消えそうな小さなロウソクの火を指差す。ここで注目しておかなければならないのは、死神が命の寿命の象徴であるロウソクを指差すとき、死神がロウソクの火、すなわち炎を指差している点である。それを見た医者は、ひどく驚いて、自分のために新しいロウソクを灯して欲しいと死神に頼む。しかし死神は、「新しいのがともるには、まずそのまえに一つ消える必要があるのじゃ」と応える。これに対して医者は、「それじゃ、古いやつを新しいのに継ぎ足してください。そうすりゃ、あのロウソクが燃えつきたら、すぐに次のが燃え出すでしょうから」と言う。ところが、二度まで医者にだまされた死神は、医者に仕返しをしようと考えていたので、真新しい大きなロウソクを継ぎ足すふりをして、わざとしくじって、医者の命のロウソクの炎を消してしまうのである。

地下の洞穴に命のロウソクが何千本も灯っている光景は、その光と闇のコントラスト、そして、大中小何千本というロウソクの揺らめく炎の壮大さによって神秘的な印象を与える。それは命の壮大なパノラマであるゆえに、同時にまた、一種の感動をも引き起こす。この炎による効果は、グリム童話『死神の名付け親』においても、また、圓朝作『死神』においても、明確に看取される。

「炎」ないし「火」は、その動的な燃焼形態からして、当然のことながら「命」を想起させる。ガストン・バシュラールは、その著書『火の精神分析』において、「火」に関する次のような洞察を述べている。

もし、ゆっくり変るものがすべて生命によって説明されるとすれば、迅速に変るものはすべて火によって説明される。火は超-生命 (ultra-vivant) である。火は内的であり、かつ普遍的である<sup>33</sup>。

古来より、火は、単に命の象徴であるばかりではなく、「プロメテウスの火」の神話からも

32 Vgl. ebenda: S.45.

33 バシュラール、ガストン・『火の精神分析』前田耕作訳、せりか書房、1981年、21ページ。/ Bachelard, Gaston: *La psychanalyse du feu*. Paris (Gallimard) 1999, S.23.

理解されるように、人間社会、そして、人間の文明の火でもあった。火が人間社会に行き渡り、各家庭で用いられるようになると、それは、人間の行動様式までも変えるに至る。つまり、火の明るさによって、家庭から夜の闇が徐々に駆逐されるようになる。火は、竈の火を初めとし、ランプの火やロウソクの火として、まさしく人間の生活を根底から支えるものとなるのである。カール・ケレーニイは、その著書『プロメテウス』の中で、この神話世界の英雄が人類に救済をもたらした経緯を詳細に論究している<sup>34</sup>。プロメテウスによって人類に火がもたらされて以来、もはや火無しでは、いかなる人間の生活形態も考えられないほどまでに、火は人間にとって極めて重要な意味をもつに至る。この意味において、火は、人間の命と等価と言えるほどの重要性をもっていると言っても過言ではない。

もちろん、ランプも人間の命の象徴になりうるが、しかし、人間の命の象徴としては、ロウソクの方が、より具象的にして、直接的であると思われる。というのも、ランプの火の場合、その火の源となる油はランプ本体の中に貯蔵されていて、その量が見極められないのに反し、ロウソクの火の場合、その火がどれだけ続くかということは、ロウソクの長さによって視覚的にはっきりと確認されうるからである。ランプの火に比べ、ロウソクの火は、はるかに人間の命を想起させる明確な長所を具えている。つまり、ロウソクの長さは、同時に人間の命の長さを具体的に示しうるのである。さらに、ロウソクの火が燃える様態、すなわち周囲の風に反応したり、ロウソクの芯がジリジリと音を立てて燃えたりする様子は、人生の有為転変を想起させずにはいない。このことに関連して、ガストン・バシュラールは、その著書『蠟燭の焰』の中で、「夢想を呼び起すこの世にあるかぎりの物象のなかでも、焰は最大の映像作因のひとつである」<sup>35</sup>とし、さらにまた次のような洞察を述べている。

消える蠟燭は死滅する太陽である。蠟燭は空の天体よりも一層ゆっくりと死にさえする。芯がたわみ、芯が黒ずんでゆく。焰はまわりをつつむ闇のなかで自分の阿片を飲んでしまっている。そして焰は申し分なく死ぬ。眠りに就きながら死ぬのである<sup>36</sup>。

この著書の中でバシュラールがロウソクの火の性質を、「上昇の導き手」「垂直性のひとつの模範」<sup>37</sup>として把握している点は、容易に理解されることではあるが、極めて重要なことである。つまり、ロウソクの炎は垂直に上昇する力をもつと同時に、その本体であるロウソクは、燃烧に伴って、徐々に垂直に下方へと短くなって行く運命にある。それは、理想を目指して天へと上昇しようと努力しながらも、最終的には寿命が尽きて死んで行く人生の具体的な象徴になっているのである。

34 Vgl. Karl, Kerényi: *Prometheus. Die menschliche Existenz in griechischer Dichtung*. Reinbeck bei Hamburg (Rowohlt Taschenbuch) 1959.

35 バシュラール、ガストン・『蠟燭の焰』 渋沢孝輔訳、現代思潮社、1976年、7ページ。 / Bachelard, Gaston: *La flamme d'une chandelle*. Paris (Presses Universitaires de France) 1996, S.25.

36 同書、36ページ。 / Bachelard, Gaston: *La flamme d'une chandelle*, S.26.

37 同書、23ページ。 / Bachelard, Gaston: *La flamme d'une chandelle*, S.23.

## 第5節 メデューサの眼差し

ここに至ると、なぜグリム兄弟が、圖朝作『死神』と『死神の名付け親』の類話とは反対に、「死神が枕元に立てば病人の命が助かり、足元に立てば助からない」という設定を設けたかという疑問が解明される準備が整ったと思われる。『死神の名付け親』の類話においては、「死神が足元に立てば病人の命が助かり、枕元に立てば助からない」という設定は、次のように解釈されるであろう。一般に、国を問わず、人間が死ぬときには死神が迎えにくるということが信じられている。この信仰にあって死神は、いずれにしても擬人化された神として登場する。それでは、一体グリム兄弟の『死神の名付け親』において、なぜ死神が病人の足元に立てば、それが病人に死をもたらすのであろうか。それは、やはりヴィルヘルムがこの童話を収録し、文体を整える際に、「ロウソクのイメージ」に捕えられていたからだと考えられる。古来より一般に、炎は、「生命力」や「魂」の象徴となっていた<sup>38</sup>。これに加えて、可視的な材質と長さをもつロウソクは、容易に人間の一生を想起させる。そこで、さらにここで一本のロウソクを人間の体に譬えてみると、ロウソクの炎は人間の頭に対応し、ロウソクの根元は人間の足に相当する。そうすると、命の火を指差す死神が病人の枕元に立っているということは、死神が対置されている命の炎が未だ高い位置にあることを示している。すなわち、ロウソクは、まだ等身大に近く残っているということを意味するのである。

このように、人間の死に関して絶対的な権限をもつ死神は、自分の立つ位置によって病人の「命の長さの大小」を指し示しているのである。他方、死神が病人の足元に立っているということは、死神が対置されている命の炎がすでに低い位置にあることを示している。すなわち、ロウソクは、ほとんど燃え尽きているということを意味するのである。どうやら、グリム兄弟の『死神の名付け親』に登場する死神は、死者を迎えにくるときには、人間の体をロウソクに譬え、病人の足元に立つことによって、その病人の命のロウソクが燃え尽きていることを告げるのである。そして、ロウソクの炎によるこの死神の行動様式を明確に思い描いていたからこそ、ヴィルヘルムは、寿命の燃え尽きた病人の足元に死神を立たせたと解釈されるのである。

加えるに、ロウソクは、語源上「輝き」や「眼差し」を意味している<sup>39</sup>。これに従えば、地下の洞窟で燃えている何千ものロウソクの炎は、「眼の光」にも譬えられる。しかも、そこにいる死神の眼は、復讐の念に燃えている。その背景には、死の元型であるタナトスの「馬に乗ったり、あるいはその翼で飛んで、犠牲者の息の根を止めるか、叩きのめす」<sup>40</sup>姿が登場する。邪悪な眼差しは、人間を死に至らせるまでの恐ろしい効果をもっている。例えば、E.T.A. ホフマンの『ファールンの鉱山』(Die Bergwerke zu Falun, 1819)に登場する主人公である鉱夫のエーリスは、結婚式の当日に花嫁に地底世界にある柘榴石を贈ろうと考える。しかし彼は、地底で地底王国女王の眼を見てしまう。この眼差しは、彼に「恐ろしいメデューサの眼を見た」<sup>41</sup>ときと同じ影響を与える。同様に、足元に立つ死神の生に敵対する恐ろしい眼差しを見つめる

38 フリース、アト・ド・『イメージ・シンボル事典』、上掲書、250-251ページ参照。

39 Vgl. *Der große Duden*. 7. Bd. Mannheim/Wien/Zürich (Duden) 1963, S. 72.

40 Manfred Lurker: *Wörterbuch der Symbolik*. Stuttgart (Kröner) 1983, S. 699.

41 E.T.A. Hoffmann: Die Bergwerke zu Falun. In: *Die Serapiens-Brüder*. Darmstadt (WSG) 1978, S. 192f.

病人は、メデューサの眼を見たときのように石化し、死すべき運命に定められるのである。

グリム童話『死神の名付け親』は、(1)ある1人の貧しい男が、神や悪魔ではなく、死神を名付け親に頼む、(2)若者が、死神が病人の枕元に立つか、足元に立つかによって病人の回復と死を判断する、(3)医者となった若者が死神をだます、(4)死神は、医者に仕返しをする、という4つのモチーフから成り立っている。圓朝作『死神』では、恐らく宗教上の理由で、第1番目のモチーフが削除されている。この点を踏まえて、グリム童話『死神の名付け親』と圓朝作『死神』とに共通した粗筋を再構成してみると、「貧しい男が、死神から病人の回復と死を判断する方法を教えてもらったが、しかし、慾に目が眩んで、死神をだましたため、死神に仕返しをされて死んでしまう話」となるであろう。この本質的粗筋が、ドイツと日本という歴史と文化の差異を超えて生き残ったものである。ここには、依然としてグリム兄弟の説く「勸善懲悪の精神」が保存されている。

「枕元 = 死；足元 = 生」という生死の判断を死神が教えるのは、グリム童話集の第2版においてのみである。そうすると、このグリム童話集第2版をドイツから日本に持ち帰り、圓朝に伝えたものは誰かという疑問が生ずる。この疑問を解明するには、当然のことながら当時の圓朝の交友関係を探らねばならない。その際、有力候補として浮上するのが、1862年に竹内下野守を主席とし、福沢諭吉や松本弘安、箕作秋坪などと共に幕府の外交使節団の通辞として、ヨーロッパ諸国へ赴いた経歴をもつ福地桜痴(1841-1906)である。1856年5月にこの使節団は、「ロンドンを発ってオランダに渡り、ハーグで同趣旨の条約をオランダと締結してから、今度は汽車でプロシャの首都ベルリンに」<sup>42</sup> 向かった。ヤーコブの甥であるヘルマン・グリムの伝えるところによれば、ヤーコブは訪ねてきた3人の日本人と会っているが、この3人が誰であるかは確認されていない。しかしながら、この中に福地桜痴が入っていたと推定せざるをえない<sup>43</sup>。そうしないと、『死神の名付け親』は、圓朝の耳に入るはずはないからである。落語家の圓朝としては、このグリム童話を読んだのではなく、福地桜痴から聞いたと考えざるをえない。落語の本質は、耳学問である。

## 第6節 炎の位置の高低

ロウソクの炎のイメージがグリム兄弟を捉えていたということは事実としても、『死神の名付け親』を改訂したのは、兄のヤーコブではなく、ヴィルヘルムであったと推定される。確かに、ヤーコブもグリム童話集の改訂に当たっては、弟に助言したではあろうが、1837年の第3版以降グリム童話集の実際的な改訂を進めたのは弟のヴィルヘルムであったと断定しうる証拠が見出される。つまり、兄のヤーコブは、その大著『ドイツ神話学』(*Deutsche Mythologie*,

42 西本晃二<落語『死神』の世界>青蛙房、1996年、227-271ページ参照。この中で西本氏は、福地桜痴に関して、かなり詳細に調べ上げている。ノ福地桜痴『桜痴全集』(上・中・下)、博文館、1911(明治44)年、参照。

43 2002年10月12日(土)に福岡大学で「レレケ教授講演会」が開催された。そのとき通訳として同行していたフローチャー美和子女史は、ベルリン国立図書館所蔵の古い新聞を調べて、この中に福地桜痴が入っていた事実を突き止めたいと話していたが、その後音沙汰はない。おそらく、その名前は見つからなかったであろう。

1833)における「死神」の項目の所で、『死神の名付け親』を次のように紹介しているのである。

[.....] われわれは「死神の名づけ親」(『グリム童話』44番)という見事な着想の童話を持っている。結末には地下の洞穴があり、そこには何千もの燈火が見わたせないほど幾列にも並んでともっている。人間の命の燈火であり、まだ長い蠟燭でともっているのもあれば、もう終わり近く燃えさしのようなものもある。蠟燭が長くても倒れたり、ひっくり返されたりすることがないとはいえない。さてこれに先立ち、死神は貧しい男のために名付け親になってやり、産まれた代子には次のような贈物をする。病人のそばに立つ自分の姿が見えるから、立つ位置から病人が治るか治らないかが分かるようにしてあげようというのである。代子は医者になり、名声と富とを手に入れる。死神が病人の枕元に立っていたら、死神のものになる、足元に立っていたら、病氣は治るというわけである。医者は何度か病人の上下を逆にして死神をだますが、結局死神は、だまされた仕返しに、代子の燈火をあつという間に倒してしまう。[.....]<sup>44</sup>

ここにおいて、ヤーコブは、「死神が病人の枕元に立っていたら、病人は死に、死神が病人の足元に立っていたら、病人は治る」と明確に述べている。この時点で「死神の名付け親」という類話は、古来より伝承されたままであったことが分かる。それを転倒させたのは、兄のヤーコブではなく、やはり「ロウソクの炎のイメージ」に強力に捕えられていた弟のヴィルヘルムであるとしか考えられない。それにしても、「ロウソクの炎のイメージ」が、一体どうようにヴィルヘルムの心象に影響を与えたのであろうか。

この問題を追究するためには、「ロウソクの炎の位置の高低」に関する意義づけを若干考察する必要がある<sup>45</sup>。ジョージ・レイコフとマーク・ジョンソンは、その共著において、英語における種々の抽象概念を空間的位置に関するメタファーでもって表現しようと試みている。ここでは、「上」と「下」という空間的位置に関して、次のように述べられている。

MORE IS UP; LESS IS DOWN,  
HIGH STATUS IS UP; LOW STATUS IS DOWN,  
GOOD IS UP; BAD IS DOWN,  
HAPPY IS UP; SAD IS DOWN<sup>46</sup>.

人間をロウソクに譬えるとき、人間の頭はロウソクの炎に、人間の足はロウソクの根元に相

44 グリム、ヤーコブ・『ドイツ神話学』より「死神」 木村豊訳、「ユリイカ」青土社、1999年、108-109ページ。 / Grimm, Jacob: *Deutsche Mythologie*. 3 Bde., Frankfurt/M.; Berlin; Wien (Ullstein) 1981, S.711.

45 筆者は、「ロウソクの炎の位置の高低」に関する意義づけにおいて、中国は北京において開催された「アジア地区ゲルマニスト会議」(2002年8月19-23日)において23日(金)に行なわれた新田氏の基調講演 „Polysemie im Deutschen und Japanischen“ から一つの重要な示唆を得た。

46 Vgl. Lakoff, George / Johnson, Mark: *Metaphors We Live By*. Chicago and London (The University of Chicago Press) 1980, S.14-24.

当する。ここに位置を表す形容詞を加味してみると、死神が病人の枕元に立つとき、死の指針となる死神はロウソクの炎がまだ高い位置にあることを示していると解釈される。また同時に、死神が病人の足元に立つとき、死の指針となる死神はロウソクの炎が低い位置にあることを示していると解釈される。そうすると、「ロウソクの炎がまだ高い位置にあること」は「良いこと」であり「幸せなこと」であることを意味し、「ロウソクの炎が低い位置にあること」は「悪いこと」であり「悲しいこと」を意味することとなる。このような位置に関するイメージに、『死神の名付け親』の文体を整える際にヴィルヘルムは捕われていたと考えられる。

地下の洞窟に何千というロウソクが灯っている光景を思い描いたときヴィルヘルムは、生と死の戦いの象徴となっているロウソクの炎のイメージに間違いなく心を奪われたに違いない。それゆえにこそヴィルヘルムは、伝統的な「死神」のモチーフとは逆に、死神が病人の枕元に立つとき病人は治り、死神が病人の足元に立つとき病人が死ぬ運命にあると、無意識のうちに書き換えてしまったのである。この物語全体の通奏低音になっている「ロウソクの炎」のイメージこそが、ヴィルヘルムが『死神の名付け親』の文体を整えるに当たって大きな影響力を与えたものであると言わざるをえない。それは、プロメテウス以来の「炎のもつ力」、すなわち拝火教をも生み出した「炎のイメージ」のなせる業である。